

ジャカルタのバス

相沢伸広

うだるようなジャカルタの暑さに、誰もが参っている時も、バスの車掌はすこぶる元気がいい。

ジャカルタのバスには、アンコットとよばれる近距離ミニバン型のバスから首都圏近郊都市へ赴く、エアコン付き一〇〇人乗りの大型のものまで、様々な種類がある。その中で、三〇人乗りの中型サイズ以上ともなれば、必ずと言っていいほど車内を取り仕切る車掌が同乗する。

バスに車掌がいること自体、日本から来た私には驚きであった。もともと、彼らが必要とする日本とは異なるバス事情を理解するのは、そう時間がかからなかった。

一番の違い、それは運賃が先払いでもなく、後払いでもなく「中途払い」であること。「中途払い」といっても、支払いのタイミングは、乗車直後のこともあれば、バスの揺れで心地よく眠りはじめた頃合いのこともある。要は、車掌の手が空いたときに、お金を回収しにくるのである。

支払いを済ませた後、次の驚きは、期待しているような切符の類がなにも渡されないうこと。支払い済みであることを示すものは無く、すべては車掌の記憶におまかせである。二重取りに来るのではと心配したり、今日ぐらいいは僕を見逃さないかなあ、と、

淡い期待を抱いたり、落ち着かない。

大型バスにもなると、前後二つのドアがつき、入口、出口の区別はなく、前後どちらからでも出入りする。そのため、車掌には、誰がどの席に座ったのかを瞬時に把握する、高い状況判断能力が求められる。熟練したジャカルタの車掌は、大抵、二、三回の乗客分をまとめて回収しに回る。バスのスピードが上がリ、乗降が一段落したタイミングで、掌中に握った小銭を「ジャリッジャリッ」と鳴らしながら、「払ってない人！」と回収に車内をまわる。我、閑せずを決め込むおっさんやおばちゃんも勿論いるが、それを見逃すような失敗はしない。狙いを定め、トントんと肩を叩き、支払いを促す。その間にも、乗客は続々乗り込んでくるが、全く混乱することはない。

車掌仕事は、バスに乗り込んでくるのが客だけではないために、実は難易度が更に高い。通称「プガメン」と呼ばれる流しのミュージシャンや、物売りがひっきりなしに乗ってくる。プガメンは一人の時もあるが、たまにフルバンドで通路をふさぐ。一〇分程度の演奏が終われば、「いかがでしたかー」と、被っていた帽子をくるっと上向きに返し、「聴き賃」を集めて回る。その姿を見てよく車掌と間違えそうになる。

ここに、物売りが参戦する。例えば、野菜切り用の包丁。これをバスの中で売り始める。バスのような密室空間で包丁を握りしめていけば、日本ではたちまち刑事事件に発展しかねない。そこを平然と「奥さんお聞き下さい」と、実演販売が突如始まる。一通り説明が終わると、車中を回りナイフを一本一本、客の膝元に置き、「みなさまお手にとつて切れ味をお確かめ下さい」とやる。四、五〇人もが車中で切れ味を試している間、私の緊張はピークに達する。

配り終えてまもなく、包丁売りは各席に赴き、ナイフを回収して回る。「いかがでしたかー」と尋ねながら、購入希望者を募る。その横を、車掌は嫌がる様子もなく、正確にバスの運賃を集めていく。

一本のバス通路は、こうして、プガメン、包丁売りが行き交い、いつも市場のように活気ついていた。プガメンも物売りも彼らは運賃を払わない。彼らと車掌は都市下層の同じ仲間である。非効率にしか思えなかった運賃支払い方法が、こうして車掌の技術に支えられ、仲間が商売する空間をも創っていた。その活気を味わってからは、私も毎日のバス通勤が楽しみになっていった。

(あいざわ のぶひろ／アジア経済研究所地域研究センター)